

第36号 平成31年3月31日発行

藍すまいる

平成19年3月19日 創刊
伊達市障がい者総合相談支援センター「あい」



「僕らは奇跡で できている」

だて地域生活支援センター所長 菊池 禮子

「僕らは奇跡でできている」はその題名に惹かれてちょっと見てみようかなと思って見始めたテレビドラマでした。昨年の10月から12月中旬ころまで放映されていました。ご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。

主人公は大学で動物行動学を教える講師として働く相河一輝ですが、彼は生き物の不思議や謎を見つけると他のことは見えなくなるくらい没頭してしまいます。そうすると時間を忘れてしまうので社会的にはルールを守れない困った人になってしまいますが、なぜか憎めないキャラクターです。作品の大筋は常識や固定観念にとらわれない主人公一輝に接することで周りの人達が自分達の価値観の意味を問い直していくというものでした。

子供時代のエピソードを見ると発達障がいを思わせるものが出てきますし、私にとっては一輝の言動はとても興味深いものでしたが、あまり一般受けするものではなかったらしく視聴率は伸びなかったようです。

さて、この作品を見続けた一番大きな理由は全編を通して「リフレーミング」が素晴らしかったからです。例えば一輝が7歳の時、学校の授業中に飛んできたハエに気を取られて立ち上がり、ハエを追いかけて担任に「席から離れるな!」と強く叱られます。泣いて帰ってきた一輝に祖父は「ハエの足は何本だった?」と尋ねます。一輝が「六本」と答えると、祖父はすごい発見をしたと褒めるのです。

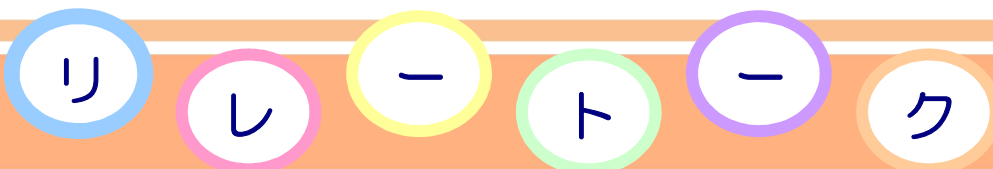
「リフレーミング」は文字どおり、フレームを変えること、物事の見方を変えることです。これは対人援助をしていく時に大切なスキルですが、かなり意識して訓練しなければなかなか身につけません。

物の見方、考え方はもちろん環境も含めて、個人が生きていく中での経験の積み重ねの中で培われていくものです。従って本人に取っては「正しい」ものに他ならないのです。この物の見方、考え方は個人で違うということをつい忘れて

しまうことがあります。良かれと思ってやったことが、言ったことが相手に上手く伝わらない、自分にとっては「常識」と思っていたことが相手にとっては「非常識」の場合もあるのです。対人援助の仕事をしているとこの「違い」に戸惑い、悩み、苦しくなることもあります。

そんな時に「リフレーミング」する事を知っていると戸惑いや悩みや苦しさが新しい経験であり、自分をより豊かにしてくれる機会とも捉えることができるようになります。

この作品は発想の豊かさを養い、私自身をリフレーミングしてくれました。ちょっと疲れている「あなた」にお勧めです。



「出会い・・・」

ホテルローヤル 代表取締役 社長 河原 文博さん

私が、この伊達のまちに来たのが、当時ローヤル総合結婚式場であった頃になりますので、ちょうど33年前になります。私の出身地は、苫小牧ですので小学校の夏のキャンプで、有珠の海水浴場にはよく遊びに来ていましたが、この伊達のまちを訪れることは、ほとんど皆無に等しい状況でした。そんな自分が、仕事の関係で伊達に到着し、すぐに当時のローヤルに入ったとき衝撃的であったこと、今でも忘れられません。それは、普通に従業員として働いていらっしやる、知的障がい者の従業員の方と接したときであります。もちろん、当時の私には、障がい者の方々と接したこともなく、お話をしたこともなかった自分でありますから、正直、どのように対応したらいいのか、まったく分からず、不安な部分さえありましたし、戸惑いがあったことは事実です。いったい、どのように接したらいいものか？ローヤルで普通に働かされている姿を見て、どういう経緯があり今の状況があるのか、それを理解するのにややしばらく時間がかかりました。

時間が経つに従い、このまちのスーパーで買い物をしたとき、道を歩いているとき、数多くの障がい者の方々をお見かけする機会が多いこと、そして、市民の誰一人がすれ違った時に、振り向くこともせず、接し方の何もかもが自然の姿であったことに驚かされました。

いったい、この伊達という街は、どういう所なんだろう？

少なくとも伊達に来るまでは、このような姿を目にしたことは一度もありませんでした。

だから、余計にこの伊達という街に興味湧いてきましたし、もっともこの街を知りたい!!

そんな思いに駆られる毎日の連続であったことを今でも、強く記憶に残っています。

僕は、今でも密かに友情を暖めている”友”との出会いがあります。

お客様をロビーで、お迎える私に「オウッ!! 猪木、元気？」と声を掛けてくれる元気なK君の存在です。

私は、大学時代から「アントニオ猪木」に似ている事から、学友仲間に「猪木!」と呼ばれていました。

さすがに、社会に出てからは面と向かって誰もこの呼名で呼ばれる事もなくなり、

そんな中での、屈託のない笑顔のK君との触れ合いは、僕の密かな楽しみの一つであります。

僕は、ホテルという仕事柄多くの方々とさまざまな場面でお会いする機会が多いです。

このことは、自分にとってはとても幸せな事だといつも感謝しています。

その中でも、障がい者の方々とお会いする機会も多く、そんな時に、

いつも笑顔でピュアな心で気持ちを返してくれるそんな場面があるたびに、

僕は、「勇気づけられている、励まされている!!」

そんな気持ちになるのです。人生、生きるよろこびがいかに大切なことか!!常に教えられている感じがします。



次回は・・・?・・・お楽しみに!

地域サロン Poco a Poco



今年は交代でお餅をつくことができ、みなさんで楽しみました♪



サロン恒例の餅つきを1月19日に行いました。お雑煮、あんこ餅、きなこ餅、たくさん頂きました!!

ハッピーサークルの活動紹介



今年度最後の調理実習でカレーライスを作りました。カレーは大量に作った方がおいしいですね。みんなが大好きな作り方も簡単！！なことからメンバーみんなで楽しく調理できました。



冬期間は身体が硬くなります。ハッピーサークルでは、ヨガ講師の笠井さんからヨガを習っています。50代以上の方がほとんどで、加齢に伴い、下肢筋力の低下や身体の歪み防止について教えていただきました。ちなみに私はヨガを習ってから、毎朝膝を上げながら家の近くの坂道を歩く運動をしています。 【熊谷記】



精神障がい者の回復者クラブです。「くつろぎの場」「仲間作りの場」になることを目指しています。月2回、日曜の10時～12時の活動で、内容は多岐にわたっています。興味のある方は「相談室あい」までご連絡ください。

わかば会メンバーからの研修報告



平成30年11月4日に旭川市で行われた「旭川はたらく仲間の会・第22回全道研修交流会」に副会長である私と新聞部の部員である片倉さんと2人で参加してきました。

午前中は札幌みんなの会の支援者でもある光増さんの講義でした。その講義の中で印象に残ったのが、療育手帳がカード化になるということだったが、結局今まで通りの手帳のままか、カード化のいずれか選択をするという話です。

午後からのシンポジウムでは、札幌・旭川・伊達・釧路から1名ずつステージに上がり、今回のテーマは「津久井やまゆり園事件を風化させるな」だったので、思い思いの立場で意見を述べました。この会に参加するおおよそ2ヶ月前にわかば会でも徹底討論しました。自分より弱い立場の人を作ってはいけないと改めて思いました。会場からもたくさんの質問などが出て、自分たちと同じ方々がうなずく場面もしばしば見られ、盛り上がりました。

この事件をきっかけに、私たちが今以上に仲間の輪を作っていきたいと感じました。

わかば会副会長 兼 交流活動部副部長 田中 勇弥



医療的ケア児等のコーディネーター養成研修を終えて・・・

医療的ケア児等とは、人工呼吸器を装着している障害児その他の日常生活を営むために医療を要する状態にある障害児、重度の知的障害と重度の肢体不自由が重複している重症心身障害児者。

医療的ケア児等コーディネーターには、医療的ケア児等に対する専門的な知識と経験に基づいて、支援に関わる関係機関との連携（多職種連携）を図り、とりわけ本人の健康を維持しつつ、生活の場に多職種が包括的に関わり続けることのできる生活支援システム構築のためのキーパーソンとしての役割が求められています。

この度、平成31年1月に「相談室あい」の相談支援専門員である村上久美子が医療的ケア児等コーディネーターの資格を取得しました。

ひとこと・・・

生活と医療が切り離すことができない方達の日中一時支援や放課後等デイサービスなど、日中活動の場が極端に少ないのが現状です。ヘルパーを始め医療機関や訪問看護などと連携を図り、少しでも活動の場がひろげられたらと考えています。 《村上》



あとがきに替えて・・・

中山くみ

2014年7月より相談室あいで仕事をさせて頂き、3月で退職することになりました。札幌から豊浦町に移住し初めての車通勤、虻田の駅から噴火湾超しに見る夕陽はとても素晴らしく、気持ちのスイッチの切り替えには最高でした。

みなさま大変お世話になりました。

誠にありがとうございました。



〒052-0014

伊達市舟岡町334-9 あい・ぷりんと1階
北海道社会福祉事業団
伊達市障がい者総合相談支援センター「あい」

電話 0142-25-3888